

商 業

1 研究テーマ

(1) 研究テーマ

「思考・判断・表現」の育成に向けた学習評価の充実

(2) 研究のねらい

知識と技術を活用した実践的な思考力・判断力・表現力を育成する授業を通して「思考・判断・表現」の学習評価の充実をねらいとした。

2 実践事例

(1) 単元の指導と評価の計画

ア 科目名：「原価計算」

イ 単元名：原価差異の原因別分析

ウ 単元の目標：

- (ア) 標準原価計算について理論と実務とを関連付けて理解するとともに、関連する技術を身に付ける。
- (イ) 標準原価計算の方法の妥当性と実務における課題を見だし、科学的な根拠に基づいて課題に対応する。
- (ウ) 標準原価計算について自ら学び、適正な標準原価計算による適切な原価情報の提供と効果的な活用に主体的かつ協働的に取り組む。

エ 単元の評価規準：

知識・技術	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
標準原価計算について理論と実務とを関連付けて理解するとともに、関連する技術を身に付けている。	標準原価計算の方法の妥当性と実務における課題を見だし、科学的な根拠に基づいて課題に対応している。	標準原価計算について自ら学び、適正な標準原価計算による適切な原価情報の提供と効果的な活用に主体的かつ協働的に取り組もうとしている。

オ 単元の指導と評価の計画： ○「記録に残す評価」 ●「指導に生かす評価」

次	時	学習活動	知	思	態	評価のポイント・指導上のポイント
1	1	【原価差異の計算①】 ・直接材料費差異の分析方法について理解する。 ・材料消費価格差異と材料消費数量差異の算定方法を理解し、ワークシートにまとめる。 ・材料消費価格差異と材料消費数量差異の発生要因について考え、ワークシートにまとめる。	●	●		【指導上のポイント】 ・算定方法だけでなく、差異の発生要因や改善方法についても意識させる。 ・算定方法だけでなく、差異の発生要因や改善方法についても意識させる。
	2	【原価差異の計算②】 ・直接労務費差異の分析方法について理解する。 ・賃率差異と作業時間差異の算定方法を理解し、ワークシートにまとめる。 ・賃率差異と作業時間差異の発生要因について考え、ワークシートにまとめる。	○	○		【評価のポイント】 ・算定方法だけでなく、差異の発生要因とその内容が管理可能か否かを理解しているかを評価する。 ・算定方法だけでなく、差異の発生要因とその内容が管理可能か否かを理解しているかを評価する。

	3	<p>【原価差異の計算③】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・製造間接費差異のうち、予算差異と操業度差異の算定方法について理解する。 ・予算差異と操業度差異の算定方法を理解し、ワークシートにまとめる。 ・予算差異と操業度差異の発生要因について考え、ワークシートにまとめる。 	●	●	<p>【指導上のポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・算定方法だけでなく、差異の発生要因や改善方法についても意識させる。 ・算定方法だけでなく、差異の発生要因や改善方法についても意識させる。
	4	<p>【原価差異の計算④】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・製造間接費差異のうち、変動費能率差異と固定費能率差異の算定方法を理解し、ワークシートにまとめる。 ・変動費能率差異と固定費能率差異の発生要因について考え、ワークシートにまとめる。 ・公式法変動予算を採用した場合と固定予算を採用した場合の違いについて考える。 	○	○	<p>【評価のポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・算定方法だけでなく、差異の発生要因とその内容が管理可能か否かを理解しているかを評価する。 【指導上のポイント】 ・算定方法だけでなく、差異の発生要因や改善方法についても意識させる。 【評価のポイント】 ・算定方法だけでなく、差異の発生要因とその内容が管理可能か否かを理解しているかを評価する。 【指導上のポイント】 ・企業の管理状況や目的により、公式法変動予算と固定予算の採用方法が異なることを意識させ、それぞれどのような予算管理となるのかを理解させる。
2	1	<p>【原価差異の分析①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・データに誤りがなにか確認をする。 ・誤りの箇所についてその発生原因を、根拠を示してワークシートに記載する。 	○	●	<p>【指導上のポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・検算のチェックの入れ方や、訂正方法を指示する。 ・検算終了後に結果を共有し、訂正箇所と正しい結果について考えるよう指導する。また、どの過程で誤りが発生したのか、さらにその原因について考察させる。 【評価のポイント】 ・標準原価計算の計算方法を理解しているかを評価する。 <p>・誤っていた箇所と誤りの発生原因を、根拠を示して説明できているかを評価する。</p>
	2 本時	<p>【原価差異の分析②】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時の原価差異の結果をもとに、原因別の分析と改善策を考える。 ・三人一グループで、原因別の分析と改善策について情報共有を行う。 	○	○	<p>【評価のポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原価差異の原因と改善策を根拠に基づいて考え、自分なりの言葉でまとめられているかを評価する。 ・他者の話を聞くことで考えが深められているかを評価する。 【指導上のポイント】 ・前時までの知識を活用し、原因と改善

		<ul style="list-style-type: none"> グループで行った情報共有をもとに、ある企業へ行く改善の提案をグループで考え、まとめる。 			<p>策を考えさせる。手が止まっている生徒には1次までのプリントを見返しながら考えるように指導する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 理解を深めるため、まずは一人で考え、その後グループで共有する。 発表の際には、会計知識の無い相手にも分かりやすい説明ができるよう、図や計算式なども使用し、ワークシートに発表内容をまとめるよう指示する。
3	3	<p>【原価差異の分析③】</p> <ul style="list-style-type: none"> グループによる発表を行い、全体共有をする。 発表の振り返りをグループ内で行い、ワークシートにまとめる。 原価差異の原因別分析について、個人的な振り返りを、Google フォームを用いて行う。 	○	○	<p>【評価のポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> 全体での発表を聞くことにより、自分の分析内容は改善できる箇所が無いかなを考えさせる。 他グループの発表を聞き、考えを深められているかを評価する。 適切な標準原価計算による原価情報の提供と活用への取組について評価する。
3	1	<p>【単元テスト】</p> <ul style="list-style-type: none"> 単元テストに取り組み、当単元の理解度を把握する。 	○		<p>【評価のポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> 当単元の目標に対して、到達しているかを評価する。

カ 授業実践例 (6時間目/8時間)

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点 (評価方法)
導入 (5分)	<p>○本時の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> 本時の流れを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の目標を提示し、授業内容の見通しをもたせる。 	
展開 (45分)	<p>○原価差異分析と改善策</p> <ul style="list-style-type: none"> 前時で確認した原価差異のデータを基に、原因別分析と改善策を個人で考える。 <p>○グループによる情報共有</p> <ul style="list-style-type: none"> 同じデータを持っている3人でグループをつくり、個人で考えた改善策を共有する。 グループで行った情報共有を基に、企業へ行く改善の提案をグループで考え、まとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの知識を活用し、原因と改善策を考えさせる。手が止まっている生徒にはこれまでのプリントを見返しながら考えるよう、指導する。 発表の際には、説明が分かりやすくなるよう、ワークシートに発表内容をまとめさせる。 	<p>【思考・判断・表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> 原価差異の原因と改善策を根拠に基づいて考え、自分なりの言葉でまとめられている。(ワークシート) <p>【主体的に学習に取り組む態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 他者の話を聞くことで考えが深められている。(ワークシート)

まとめ (5分)	<p>○本時の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに改善点をまとめられているか確認する。 <p>○次回の活動について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時にグループでまとめた内容を他グループに発表し、他の発表を基に改善点をブラッシュアップしていく。 ・単元全体の振り返りアンケートを行う。(Google フォーム) 		
-------------	---	--	--

研究実施校：神奈川県立相原高等学校(全日制)

実施日：令和7年10月30日(木)

授業担当者：菅 和樹 教諭

(2) 「指導と評価の一体化」の実現に向けたポイント

ア テーマ設定の背景

商業科目には、知識や技術の学びに偏りがちな科目が多く、特に、「簿記」「財務会計」「原価計算」といった会計分野の科目は、知識や技術の習得に偏るといって指摘をよく耳にする。その背景には、検定試験の合格を重視する教育方針や仕訳といった記帳・計算技術の習得に重点が置かれてきたためである。また、これらの技術の習得は科目を理解する上で必要不可欠な内容であるため、どうしても授業で多くの時間を割く必要があるのが現状である。しかし、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校 専門教科 商業』には、「思考・判断・表現」の評価について、「『思考・判断・表現』は、各教科等の知識及び技術を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかを評価するもの」「教師は『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善をする中で、生徒が思考・判断・表現する場면을効果的に設計するなどした上で、指導・評価することが求められる。具体的な評価の方法としては、ペーパーテストのみならず、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品制作や表現等の多様な活動を取り入れたり、それらを集めたポートフォリオを活用する」(国立教育政策研究所 2021 p.10)と示されている。このことから、本研究では「思考・判断・表現」の評価方法に着目した。

一方で、この偏りを改善しようとする動きも活発化している。簿記で培った知識や技術を、実際のビジネスにどう生かすかという応用力や、数字から経営状況を読み取る思考力を養うための取組が進められている。そこで、今回「原価計算」において、生徒が知識と技術を活用して、自分なりの答えを導き出す場面を設定するとともに、学習評価の充実に向けて取り組んだ。単元として「原価差異の原因別分析」を設定した。本研究においては、前時までに学んできた知識を活用し、原価差異について科学的根拠に基づいて分析し、自分の言葉でまとめ、他者に表現する活動に重点を置いた。

イ 指導のポイント

(ア) 活動場面の設定

始めに、知識習得と定着をさせる活動として、教科書や問題集を使用しながら原価差異の計算や発生原因についての演習問題を多く解かせた。次に、習得・定着した知識と技術を活用した思考力を育成させる活動場面を設定した。具体的には、グループごとにデータが異なるワークシート(図1)を配付し、まずは個人で原価差異分析を行わせた。その後、グループ内でチェックを行い、その分析結果を用いて原価差異の原因と改善案を考え、発表し、改善案のブラッシュアップを行った。改善案の提案を行う活動を通して、思考力・判断力・表現力の育成を図る活動場面に多くの時間を設けた。

差異分析、原因と改善案が
評価対象

標準原価カードの数値以外、
各グループでデータが異なる。

A製品			
標準原価カード			
	標準単価	標準消費量	金額
直接材料費	¥ 120	20 kg	¥ 2,400
	標準賃率	標準直接作業時間	
直接労務費	¥ 1,200	3 時間	¥ 3,600
	標準配賦率	標準直接作業時間	
製造間接費	¥ 800	3 時間	¥ 2,400
	製品 1 個あたりの標準原価		¥ 8,400

生産データ			
月初仕掛品	80 個	(加工進捗度 50%)	
当月投入	510 個		
合計	590 個		
月末仕掛品	100 個	(加工進捗度 40%)	
完成品	490 個		

当月投入量			
材料費	490 個	標準消費数量	9,800 kg
加工費	490 個	標準作業時間	1,470 時間

当月製造費用実際発生額		製造間接費予算		
直接材料費	¥ 1,160,000	(@¥ 116 × 10,000 kg)	変動費率	¥ 480
ただし、直接材料は、製造着手のときにすべて投入されているものとする。			固定費(月額)	¥ 496,000
直接労務費	¥ 1,862,500	(@¥ 1,250 × 1,490 時間)	基準操業度	1,550 時間
製造間接費	¥ 1,290,000			

原価差異分析		分析結果・改善策・コメント	
原価差異	¥ 196,500	(不利)	
直接材料費差異			
直接材料費差異	¥ 16,000	(有利)	
材料消費価格差異	¥ 40,000	(有利)	
材料消費数量差異	¥ 24,000	(不利)	
直接労務費差異			
直接労務費差異	¥ 98,500	(不利)	
賃率差異	¥ 74,500	(不利)	
作業時間差異	¥ 24,000	(不利)	
製造間接費差異			
製造間接費差異	¥ 114,000	(不利)	
予算差異	¥ 78,800	(不利)	
能率差異	¥ 16,000	(不利)	
操業度差異	¥ 19,200	(不利)	

図 1 グループごとにデータが異なるワークシート

(イ) ワークシートの工夫

先述した通り、グループごとにデータが異なるワークシート(図 1)を準備した。当該ワークシートには、事前に原価差異の分析結果を記載しているが、既習事項の定着度を確認する目的で、意図的に一か所のみ誤りを含むデータを設定した。この誤りは、単なる数値の入力ミスに留まらず、多様な要因によって発生したと想定される状況を再現する形で作成している。

例えば、図 2 では、当月投入量の「材料費」の個数に誤りがある。材料は製造着手のときにすべて投入されるため、加工進捗度を使わず 510 個とすべきである。組み込んだ誤りは一か所であるが、一つの誤りによって「標準消費数量」「原価差異」「直接材料費差異」「材料消費数量差異」にも派生的な誤りが生じている(図 2)。

生徒はデータが正しいものかを確認しながら分析し、誤りを発見した場合には誤りの原因を考えながら分析を進める。また、教師も生徒が誤りの根拠を示すことができるかを、ワークシートを通して評価することができる。

材料費の誤りから、
直接材料費差異の誤りを正しく
分析する

A製品			
標準原価カード			
	標準単価	標準消費量	金額
直接材料費	¥ 120	20 kg	¥ 2,400
	標準賃率	標準直接作業時間	
直接労務費	¥ 1,200	3 時間	¥ 3,600
	標準配賦率	標準直接作業時間	
製造間接費	¥ 800	3 時間	¥ 2,400
	製品 1 個あたりの標準原価		¥ 8,400

生産データ			
月初仕掛品	80 個	(加工進捗度 50%)	
当月投入	510 個		
合計	590 個		
月末仕掛品	100 個	(加工進捗度 40%)	
完成品	490 個		

当月投入量			
材料費	510 個	標準消費数量	10,200 kg
加工費	490 個	標準作業時間	1,470 時間

当月製造費用実際発生額			
直接材料費	¥ 1,160,000	(@¥ 116 × 10,000 kg)	
ただし、直接材料は、製造着手のときにすべて投入されているものとする。			
直接労務費	¥ 1,862,500	(@¥ 1,250 × 1,490 時間)	
製造間接費	¥ 1,290,000		

製造間接費予算			
変動費率	¥ 480		
固定費 (月額)	¥ 496,000		
基準操業度	1,550 時間		

原価差異分析			
原価差異	¥ 148,500	(不利)	
直接材料費差異	¥ 64,000	(有利)	
材料消費価格差異	¥ 40,000	(有利)	
材料消費数量差異	¥ 24,000	(有利)	
直接労務費差異	¥ 98,500	(不利)	
賃率差異	¥ 74,500	(不利)	
作業時間差異	¥ 24,000	(不利)	
製造間接費差異	¥ 114,000	(不利)	
予算差異	¥ 78,800	(不利)	
能率差異	¥ 16,000	(不利)	
操業度差異	¥ 19,200	(不利)	

分析結果・改善策・コメント	

分析結果・改善策・コメント	

分析結果・改善策・コメント	

図2 図1でのデータの誤りを正しく分析した結果

(ウ) ジグソー法

思考力・判断力・表現力の育成のためには、知識の教授だけでなく、主体的・対話的で深い学びが必要である。そのため、まずは主体的な学びの視点から個人で実践的な課題に取り組み、次に対話的な学びの視点からグループ内で協議を行い、最後に深い学びの視点からよりよい改善案の考察に取り組むワークを行った。さらに、グループで検討した原価差異の原因と改善案について、図3に示す3段階の展開でジグソー法の要素を取り入れ、他グループと共有することで更なる思考の深化を図った。分析結果を持ち寄ったグループ間で、①短時間で多くの意見を収集すること。②生徒全員が発表する場を設定すること。③収集した意見を共有して集約すること。この3点ができるようグループの再編成・再集合の方法を工夫した。

具体的には、元の分析グループで検討した後、メンバー全員をエキスパートとして異なる意見集約グループへ分散させ、そこで各自が元のグループの意見を発表・共有する。これにより、全員に他グループの多様な意見を持ち帰る役割と責任を持たせ、他者の意見を鵜呑みにすることを防ぎ、能動的な学習を促した。その後、元のグループへ戻って持ち帰った情報や新たな視点を共有し、統合・再検討を行った上で個人での振り返りを実施することで、多角的な視点から原価差異について考察し、思考を深化させた。

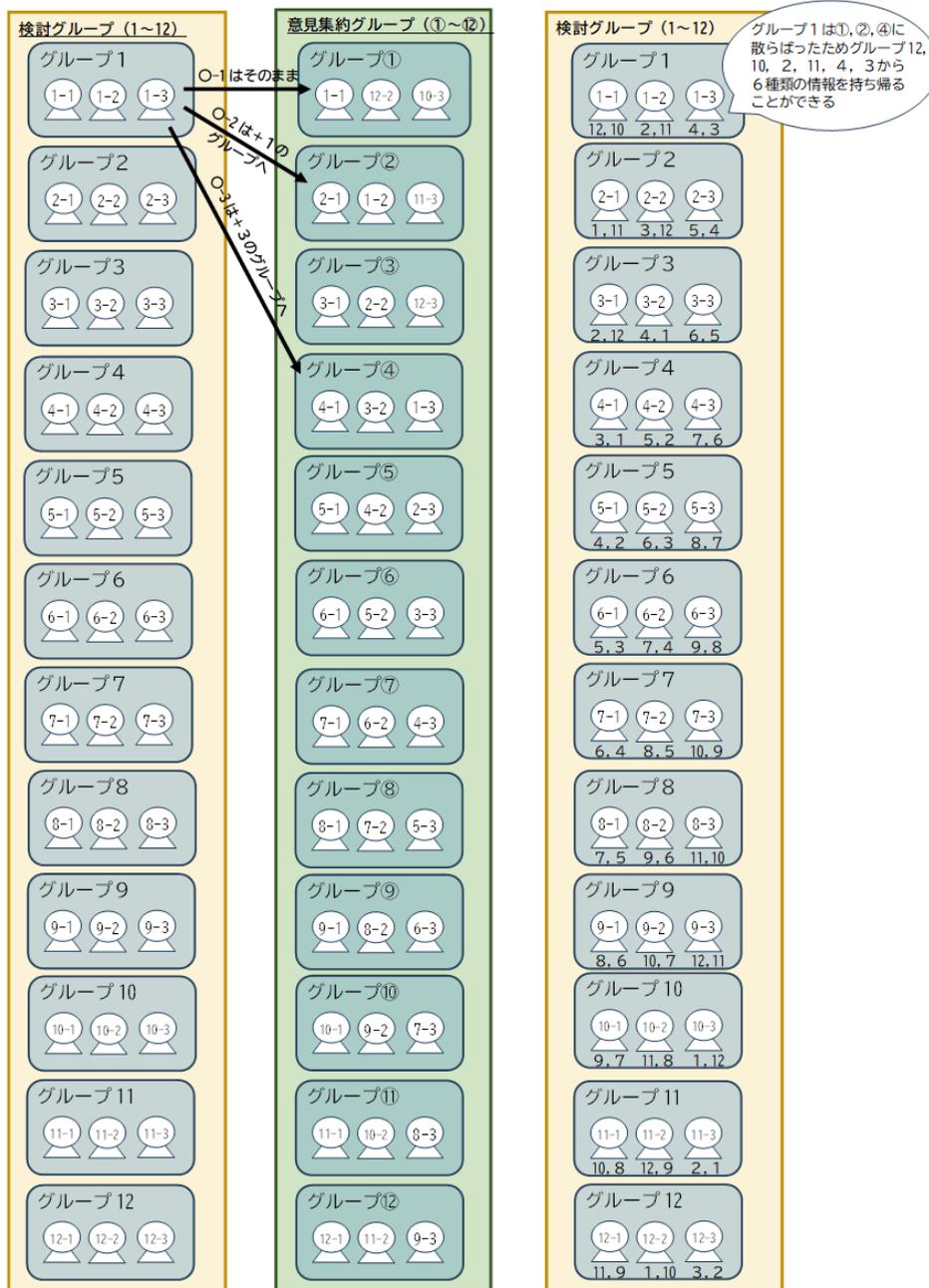


図3 ジグソー法の要素を取り入れたグループ構造

(I) 振り返りアンケート

振り返りアンケートには、振り返りの三要素を意識する問いを設定した。振り返りの三要素とは、本推進委員会にて定義したもので、「獲得した知識・技術」「解決した過程・学び方」「情意」を指す。特に自己調整においては、「解決した過程・学び方」が重要となる。そのことを意識しなければ、一つの過程のみに着目した振り返りになってしまったり、どこかの過程が抜けてしまったりと、充実した振り返りにならない。質問項目は図4のとおりである。

- 項目1. 単元のはじめに目標を掲げられた際、どう感じたか(選択肢)
 項目2. 差異分析の計算(材料費差異)について、計算できるようになったか(選択肢)
 項目3. 差異分析の計算(労務費差異)について、計算できるようになったか(選択肢)
 項目4. 差異分析の計算(製造間接費差異)について、計算できるようになったか(選択肢)
 項目5. 差異分析結果から考えうる要因と改善案を伝えることはできたか(選択肢)
 項目6. 他者の意見を聞くことで、変化はあったか(選択肢)
 項目7. 問題集で演習した際の理解度を「3」とした時、ワークシートでの学習で理解度はどう変わったか(低い「1」～高い「5」)
 項目8. 単元を通して自己の学習調整として工夫したこと(自由記述)
 項目9. この単元の学習を終えて、単元の初めと比較して、この単元で何ができるようになったか(一つの質問の答えとも比較して回答)(自由記述)

図4 振り返りの質問項目

ウ 検証

(7) 振り返りアンケート

単元終了後、振り返りアンケートを実施した。結果を図5～7に示す。

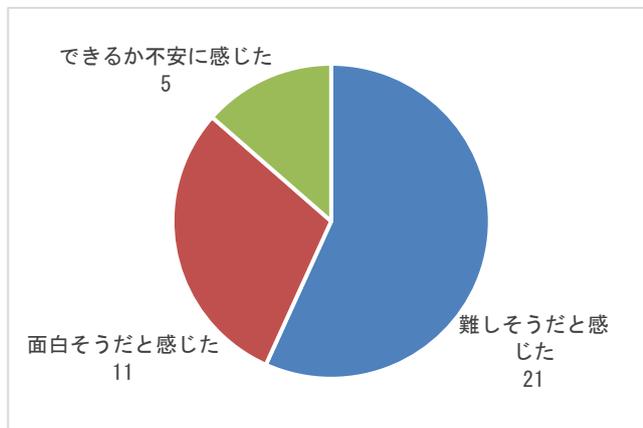


図5 単元のはじめに目標を掲げられた際、どう感じたか(項目1) (n=37)

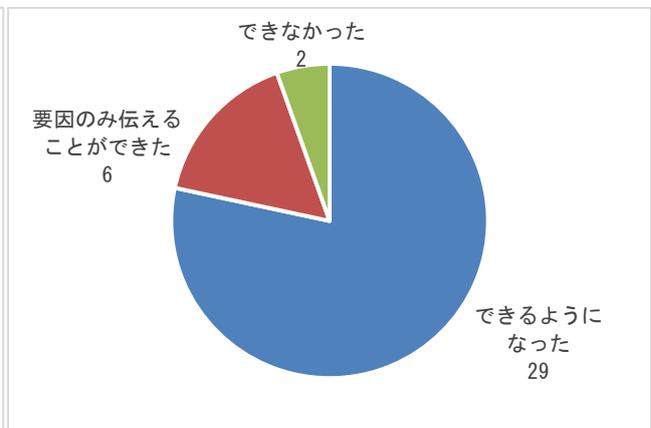


図6 差異分析結果から考えうる要因と改善案を伝えることはできたか(項目2) (n=37)

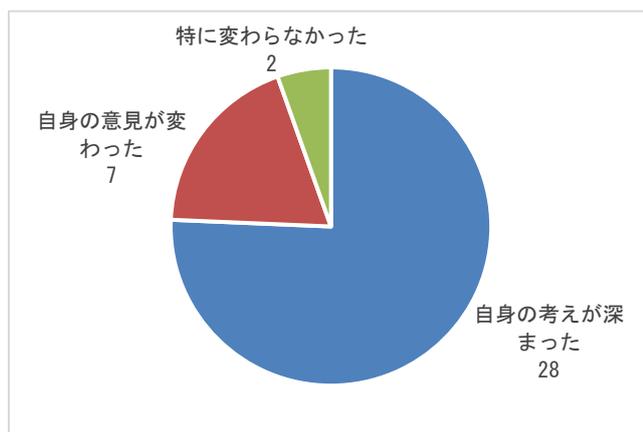


図7 他者の意見を聞くことで変化はあったか(項目3) (n=37)

項目1「単元のはじめに目標を掲げられた際、どう感じたか」には、21名(約57%)の生徒が「難しそう」、5名(約14%)の生徒が「できるか不安に感じた」と回答していた(図5)。また、授業中の生徒の発言では、「自分には無理だ」「計算ミスが怖い」といった不安の声が多数を占めていたことから、これまでの「正解主義」の授業が生んだ弊害と思われる。しかし、単元の終わりには、29名(約78%)の生徒が「差異分析結果から考えうる要因と改善案を伝えることができるようになった」と回答している。また、生徒が記載したレポートを見ても「材料費の高騰は市場要因なので、現場へのペ

ナルティは避けるべきだ」(※原文ママ)といった、実務と関連付けた記述が増えた。

項目9「この単元の学習を終えて、単元の初めと比較して、この単元で何ができるようになったか(一つ目の質問の答えとも比較して回答)」においても、「前はとりあえず計算ができるだけで、あまり内容を理解していなかったです。コンサルティングのような事をやってみて、工場の改善点を考えたりして具体的に理解ができました。」「初めはちゃんと説明などができるのか心配だったけれど、今は、どの数字がどうなっているからこのようなことが起こっている、という簡単な事なら説明が出来るようになったのかなと思います。また、計算においても初めに比べてどの数字を使うのかを考える時間が減っていったのかなと思いました。」(※原文ママ)などの記述があった。また、項目2～4から、1名は労務費差異分析ができないと感じているが、その他の生徒は、材料費・労務費・製造間接費すべての差異分析を概ねできるようになったと感じていることが分かった。

さらに、項目7「問題集で演習した際の理解度を『3』とした時、ワークシートでの学習で理解度はどう変わったか」には、25名の生徒が「4」、8名の生徒が「5」と回答しており、活動場面の設定の工夫により生徒の理解度が上がったことがわかる。

項目6「他者の意見を聞くことで、変化はあったか」には、「自身の意見が変わった」と答えた生徒は7名(約19%)であったが、「自身の意見が深まった」と答えた生徒は28名(約76%)であった(図7)。生徒からの意見では「他の人からの意見などでたくさんの改善策を知った。」「今回の授業で自分が考えつかないような案を聞いて自分の知識が深まった。数時間で擬似的だけどコンサルティングのようなことができるようになったと思う。」(※原文ママ)などがあった。これらの意見やレポートの記載内容、及び図7の結果から、ジグソー法を活用した対話的活動により、生徒の思考が深まる効果が確認できた。

(イ) 研究協議

研究授業後に行った研究協議は、授業を参観した20名で行った。研究協議においては、振り返りシート及び、振り返りの在り方を中心にして協議を行った。良かった点として、「生徒が差異の意味を考え、さらに改善点も考えることで学びが深まっていた」「改善点を考える際、『他人がどう思うか?』という視点も入れていた」「不利差異だけでなく、有利差異にも『なぜ?』と考える生徒がいた」などが挙げられた。

一方で改善点として、「差異分析をする企業について、題材をもっと作りこみ、ストーリー性があった方が良かった」「材料費・労務費・経費に分けて話をするのではなく、製造原価の全体を見られると思考力・判断力・表現力が育つと感じた」などの意見が挙げられ、教材のブラッシュアップが必要であることが分かった。

(ウ) 思考・判断・表現における記録に残す評価

原価差異分析の要因と改善点を考えるにあたり、基本的にはワークシート(図1、2)での記述と改善策提案用資料(他グループへ意見を発表・共有する際に生徒が必要に応じて作成)をもって、評価基準(表1)を設定し、評価した。今回は、特にA評価とB評価の境界線をどこに置くかを主眼とし評価基準を設定した。生徒たちには事前にこの基準(ルーブリック)を提示しており、「どうすればA評価になるか」を意識しながら活動に取り組ませた。

表1 思考・判断・表現における記録に残す評価基準

B(おおむね満足できる)	A(十分満足できる)	C(努力を要する)
・原価差異の原因と改善策について、数値的・科学的な根拠に基づきまとめられている。	・原価差異の原因と改善策について、数値的・科学的な根拠に基づき、自分なりの言葉で論理的にまとめられている。 ・図表を用いて可視化するなど、相手に伝わりやすい工夫がある。	・原価差異の原因と改善策について、数値的・科学的な根拠に基づきまとめられていない。 【手立て】 企業の立場で差異の要因と改善点を引き出すなど、改善するための視点や方法について助言する。

B評価については、計算が正確で、原価差異の原因を特定し、一般的な改善策を記述できているレベルとし、「無駄遣いを減らす」「作業効率を上げる」といった、定型的な記述ができていないかを判断基準とした。

これに対し、A評価を得るためには、もう一段階上のレベルとして、「根拠に基づく論理的提案」と「相手意識」について踏まえているのかを重視した。「なぜその改善策が有効なのか」を、数値的根拠(例えば「過去3ヶ月のトレンドと比較して」など)に基づいて論理的に説明でき、経営層に報告することを想定し、グラフや図解を用いて「可視化」する工夫があれば、A評価とした。この基準に従い評価を行ったところ、Bが30名、Aが7名、Cが0名であった。

表2「おおむね満足できる」状況(B評価)の記述例では、原価差異を正しく計算し、不利差異の原因となっている内部要因と一般的な改善策を思考・判断・表現することができている。しかし、生徒㊦の意見の中にある「新しい機械の導入」には多額の費用が掛かり、企業全体の利益に対する意識が薄い。また、「従業員を多く雇うこと」が効率をあげることに繋がるかという部分については説得力がない。生徒㊧の意見の中にある「ボーナス」や時給を上げることにより、「従業員のモチベーション」は上がるが、結果的に賃率差異に影響が出るという全体的な改善策にはならないことからB評価とした。

表3「十分満足できる」状況(A評価)の記述例(表3)では、B評価と判断した生徒と同様の状況であることに加え、利害関係者を意識した分かりやすい具体例の提示をしている。マニュアルの多言語化であったり、時間外労働について確認が必要など、提案についてもすぐに取り組めるものやイメージしやすい提案の仕方になっていることからA評価とした。

表2 「おおむね満足できる」状況(B評価)の記述例(原文ママ)

生徒㊦	数量差異や作業時間差異が不利差異になっている原因は、作業効率が悪いからです。そのため、新しい機械を導入し、従業員を多く雇うことで効率を上げましょう。
生徒㊧	能率差異がよくありません。作業の効率が悪いことが原因です。ぜひ、ボーナスをあげるなどして、従業員のモチベーションを高くして、作業効率が上がるようにしてください。

表3 「十分満足できる」状況(A評価)の記述例(原文ママ)

生徒㊦	作業の非効率化による差異が分析結果として出ている。効率的に作業するためには、指示役となる方の育成やマニュアルの見直しを行う必要がある。
生徒㊧	材料の市場価格の変動のような外的要因は管理不能ですが、仕入先と友好的な関係を築くことが、仕入価格に良い影響があるかもしれない。

エ 成果と課題、今後の展望

(7) 成果

a 活動場面の設定

生徒が知識と技術を活用し、実践的な思考・判断・表現を行う場面を設定することで、生徒の思考が深まるだけでなく、知識の理解度の向上も同時に達成できた。授業後に実施した単元テストでは、37名中34名の生徒が80点以上を獲得しており、知識の理解度が向上したことが確認された。今年度8時間で行った原価差異の原因別分析の単元だが、例年と学習の設定時間は変わらない。これまでは、問題集を使用して演習・解説をする時間を多くとっていた。これは、知識・技術の学びに偏る教師から生徒に向けて一方向な授業の典型的な例だと考える。今回は思考・判断・表現する活動場面を設定し、生徒はこれまでに学習した知識・技術を活用して、原価差異分析を行うだけでなく、その改善方法を自分なりに考え、周りと共に共有することで深い学びとなる学習活動が行えた。単に計算ができるというだけではなく、どの数値からそれぞれの原価差異が算出されているのかを理解し、計算を行う際に必要なデータを即座に判断できる能力が身に付いた。

b ジグソー法

ジグソー法における「意見集約グループ」での活動は、生徒全員が自らの分析結果を他者に伝え

る「発信」の場となり、知識の理解度を向上させる機会となった。また、多角的な分析結果を短時間で「収集」し、他のグループの異なる意見を精査・検討することで、単なる計算技術の習得から一歩踏み込んだ、論理的な判断力を育んだ。さらに、最終的に元のグループに戻り情報を共有・統合することで、知識のない相手にも分かりやすく伝えるための簡潔な表現力と多角的な視点から改善策を検討するための思考の深化に繋がったと考える。

振り返りアンケートの結果からも、ジグソー法における「意見集約グループ」での活動は、教科の目標でもある「商業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、地域産業をはじめ経済社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力」の育成につながる機会となったと考える。

(イ) 課題

本研究では「思考・判断・表現」という定性的な能力を評価対象としているため、複数の教師が担当する場合、評価基準の解釈や重視する点によって評価のばらつきが生じる可能性がある。表1に示される評価基準について、評価者間で「科学的な根拠」の妥当性の判断に共通認識がない場合、公平かつ信頼性の高い評価付けが困難となる。実際に、複数の教師で同じ生徒のレポートを評価した際、教師によって評価が分かれるケースがあった。

(ロ) 今後の展望

本研究で、商業教育全体における「知識・技術の習得偏重」から「知識を活用した課題解決学習」への転換の可能性を見いだした。教師の適切な課題設定と学習評価の工夫で、生徒たちは計算技術だけではなく、「科学的根拠に基づく創造的な課題解決力」を発揮できると考える。また、学習評価とは、単に生徒を格付けするものではなく、「どこまで考えられたか」「次はどうすればよいか」を生徒自身が把握し、自らの学びを調整するための指針として機能することが求められる。

今後は(イ) 課題で述べた、評価者間の一貫性の確保という課題に対し、評価ルーブリックの整備を進めていきたい。この意見の発信・収集・共有をする方法については、様々な授業で利用できるため今後も活用していきたい。

参考・引用文献

文部科学省 2018 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説商業編』 実教出版

国立教育政策研究所 2021 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校 専門教科 商業』